

## < 解 説 >

子どもたちが体験活動・ボランティア活動を行うことの意義を考えると自らその大切なポイントが浮かび上がる。コーディネーションの目的そのものであるが、すなわち、

- 1 子どもたちが自主的・自発的・主体的活動を展開しているかどうか。子どもたちがその事業の趣旨を理解し自ら企画・運営に関わっているか、子どもたち同士の親しい良い関係が形成されているか、子どもたちの振り返りは生かされているか。子どもたちの次への展望（子どもたちからの地域への貢献など）が描かれようとしているか。
- 2 その事業展開において、地域の情報を収集とその提供によって、適切な人材・団体をネットワークさせているか。
- 3 大人たちがその目的ミッションを共有しているかどうか。
- 4 大人たちが対等の立場で話し合いをして進める組織作りができているか。大人同士の親しい関係が形成されているか、自己実現が図られているか。

まず、広島県廿日市市大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センターでは子どもたちが主体になっている。日頃お世話になっている地域の方々への感謝を「ふれあい喫茶」への参加でお返ししている。活性化した喫茶は子どもたちに充実感をもたらす。小学生でも中学生でも地域を明るくし貢献することができるという自信は、地域の一員としての自覚をもたらす市民性を育む。活動の中で協力性も育つ。「見守り隊」として支えてくれた地域の方々に対する信頼感は広く「社会に対する信頼感」を子どもたちに植え付けたと考える。徳島県松茂町人材バンクでも子どもたちにアンケート調査をして彼らのニーズを探っている。プログラム編成の基本に子どもの主体性を置きたいものである。

事業展開における人材・団体のネットワークングでは各支援センターともに工夫を凝らし多様な形態を持っている。徳島県松茂町人材バンクや大分県由布市湯布院町青少年ボランティアサポートセンターでは、一から、人材バンクの設置を始め、その組織化を行っている。三重県志摩市ドキ・ワク阿ミ〜児や広島県東広島市ボランティア活動支援センターは既に地域で活発に活動しているボランティア推進機関やNPOと連携して、その力を生かしてもらって有効に事業を展開している。長野県塩尻市ボランティア活動支援センターは各団体が参加する「協議会」を設置して組織化し、広島県東広島市ボランティア活動支援センターは各団体が参加する運営委員会を組織し、事業自体でも各団体に参加のメリットを享受してもらいその意欲を高めている。各団体の成長と連携の強化は支援センター自身の成長ともなり、それに伴って企画立案の段階から絡んでもらえるとより大きな発展となるであろう。運営ボランティアとして参加した高校生・大学生の絡みも同様である。

大人同士の親しい関係が形成されているか、自己実現が図られているか、という点では、石川県能登町子どもの居場所づくり支援センターがユニークである。地域から自主的に結成されたボランティア団体が中核になり支援センターもその自主性を支えている。団体内では個々のメンバーの活動希望を他のメンバーが支える形になっており、それぞれの自己実現が大切にされ無理のない活動で魅力的である。北海道千歳市子ども活動支援センターは地域の方の要望を大切にし、細心の注意を払ってアイヌ文化の体験学習の場を設けた。

全体として感じたことは、大都市部ではなく地方の市町村においては近隣自治体や県との

連携などにより広範囲のネットワーク形成を志向することも有益ではないかということと学校との連携を視野に入れることである。

(橋本 洋光)